

今、改めて国際交流の意義を問う

日本病院薬剤師会理事
旭川医科大学病院薬剤部
田崎 嘉一 Yoshikazu TASAKI



3年前の2019年12月に本誌の巻頭言で「病院薬剤師による国際交流の意義」と題して病院薬剤師の国際交流の意義について述べた。その年の9月には国際薬剤師・薬学連合（FIP）の年会である第79回 World Congress of Pharmacy and Pharmaceutical Sciencesがアラブ首長国連邦の首都アブダビで開催され、2020年はスペインのセベリアで開催される旨を宣伝した。しかし、その直後に新型コロナウイルス感染症がまん延し、FIPもデジタルイベントとして2020年はWEBで開催されたが、2021年は年会自体が開催されなかった。現在のところ2022年はセベリアにて現地開催を目指しているが、実際には以前のような開催は難しいと考えられ、ハイブリッド開催やWEBのみになる可能性も考えられる。ちなみにセベリアの翌年はブリスベン（オーストラリア）、翌々年はケープタウン（南アフリカ）に開催地が決定されているものの、セベリアでの開催延期に伴ってその後の開催も繰り越されている。

このように事実上、海外への渡航が非常に難しくなり、国際学会も現地開催ができなくなると、海外の情報を得るのも苦労する。国際学会の多くが実質WEB開催にならざるを得ないが、それでもコロナ禍で一気に普及したWEB会議システムで、できることから始めてみることは重要と思われる。病院薬剤師の国際交流は、世界の病院薬剤師との交流で単に異なった医療環境を知ること、普段聞けない話を聞くこと、そしてそれを自分なりに考えてみることで新しい道へと繋げていくことにある。これらの目的の一部は達成できるのではないだろうか。病棟薬剤師の業務も、米国の活動からヒントを得てここまで成長してきた。今こそこのような得難い情報を得て、私達の業務に繋げていく必要があると思われる。

一方で、国際交流委員会の活動もかなり制限を受けており、会員が海外と接する機会も減っていると思う。そのなかでも、昨年7月のFuture Pharmacist Forumで国際交流委員会企画のシンポジウムを開催し、演者の国際交流や海外発表の話に刺激を受け様々と考えを巡らせた会員もいると思う。私もその一人である。本フォーラムに限らず、今後も国際交流の話に耳を傾けてもらいたいと思う。

私達薬剤師、特に地方の薬剤師は日常の業務をこなすことで精一杯になっていると思うが、少しの時間でも何かできることを一歩踏み出すことによって視界が開けることもある。その一助になるものとして、国際交流委員会の活動を展開していきたいと考えている。